

楽弓

その歴史、製作と用法

第一部 歴史—2 モダン弓以降

第4章 モダン弓のはじまり—装飾—ストラディバリ弓の可能性—可動フロッグ—刻み目—スクリュー

THE BEGINNINGS OF THE MODERN BOW—ORNAMENTATION—A POSSIBLE STRADIVARI BOW—THE MOVABLE NUT—THE CRÉMAILLÈRE—THE SCREW NUT.

大変残念ですが歴史的に見て初期の弓についてお話するにはかなり不確実な要素がまとわりつきます。

その原初の使われかたについても、現代の東洋での使われ方を参考にして、反論の余地はあるにせよ、太古から変わらぬ形態のまま伝わってきたとみなすしかありません。

中世の弓についてはもう少ししかかなよりどころがあります。8世紀から9世紀以降は、細密画や写本や絵画などに描かれており、その年代や、しばしば筆者さえも特定することができます。この場合はまずまずの結果は得られますが、前に述べたように正確な描写であると言えるものはほとんどありません。

17世紀から18世紀にかけて、私は弓の曖昧模糊とした歴史の流れを解明しようとする中で更にフラストレーションにかられました。この時代なら、読者の皆様に正確さについては保証できる絵や写真をお見せできます。ところが、それを年代順にならべようとする不幸なことに推測の域をでなくなるのです。初期の弓製作家達はとても控えめだったので、弓には名前をつけていませんでした。多くのものが素晴らしい技術の結晶であり、非科学的な製法でモダンバイオリニストの要求とは違

うのかもしれませんが、労力を惜しまずに作られた精巧な美術品なのです。フルーティング（訳注 シャフトの縦溝飾り）などの装飾はデザインや仕上げの点で驚異的とも言えるほどのものです。

私のように学究的ではない物書きは、古い弓の記録の中で多くの相矛盾する細部があると困ってしまいます。練達の科学者は冷静に判断して、熟練した観察眼で、彼が公表しようとする理論を支える事実だけを直ちに選び出し、それ以外の要素は黙って無視するのです。

そうすればとても満足のいく結果は得られるでしょう。このようにしてフェティスはトルテの記事の中で「17世紀と18世紀における弓の継続的な改良の展示」*"Display of the successive ameliorations of the bow in the seventeenth and eighteenth centuries."*と称して弓の歴史を概説しました。

1620年のメルセンヌ、キルヒャー、カストロヴィッラーリ、バツサーニ、コレッリ、タルティーニ、クレーマーから1790年のヴィオッティまでの弓の図が掲載されています。ここで、反った弓が真っ直ぐなものに、さらにはスプリングとかキャンバー（上ぞり）と呼ばれるものに変わっていく様子が示されています。並び順は完全で、最後の図（1790年のヴィオレッティ弓）だけがキャンバーを見せています。私がイラストを描く目的のために、A.ヒル氏がコレクションの中からご親切に貸出して下さった古代の弓の中にも、何本かかなり初期のものであるのにはっきりとキャンバーを持ったものがあります。その中の数本はとてもエレガントです。私は科学者ではないので、こんな早い時期から進化のきざしがあった事実を無視する術を知りません。その結果、この部分があいまいな記述になるとしてもです。

実際問題として、弓の歴史の中で明確なことというのは、弓の質に対する認識の欠如でしょう。初期の弓製作者のさまざまな資質の違いによることは確かですが、ある者は古いタイプの弓を作り続け、一方、より才能に恵まれた者はトルテの天才と観察による結果を先取りしたりもしました。

世界の他の分野の発達史においても多くの人達が正しい方向を模索し続けましたが、一人の天才が現れて直感的に多様なニーズを把握し余人の凌駕し得ない完璧な解決策を見いだします。

17世紀に作られた弓になると、現存するサンプルの描写や写真が使えるので、絵画や彫刻などからの事例には頼らなくてよくなります。

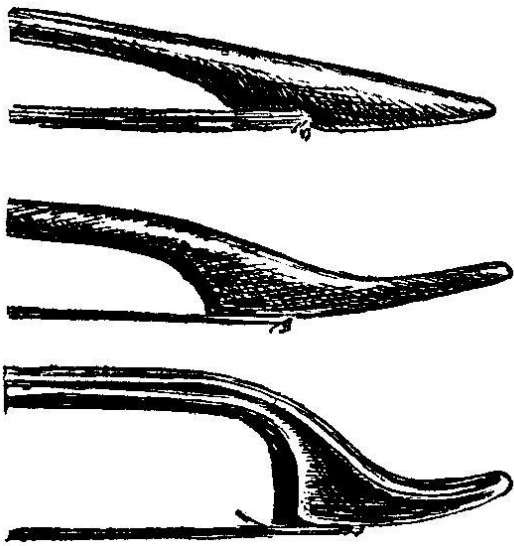


図25

い割れ目を除くために短く切断されました。この弓は全長 28 1/8 インチ(約71cm)、ヒール部での毛の距離は 3/4 インチ(19mm)、毛の幅は 1/4 インチ(約6mm)です。ナットは前のものと同じように作られています。

3番目は17世紀末期かまたは18世紀初頭の作品です。この弓のシャフトは全長にわたってフルート加工されています。手元の3分の一は溝の間にもう一つ隆起した線があります。この弓では驚くべきことにモダン弓のようにスクリー式の可動ナットが組み込まれている上に、はっきりとキャンパーも見られます。スティックの内ぞりは水平の直線25 1/2 インチ(65cm)に対してまるまる 4 分

の1インチ(6mm)ありますが、弓に十分な弾性を与えるにはまだ低すぎます。この寸法であの硬いスネークウッド材で作られたので、方向は間違っていないでしたが結果としては成功したとは言えませんでした。弓の全長は28 1/2 インチ(72cm)、毛の長さで23 1/2 インチ(60cm)です。

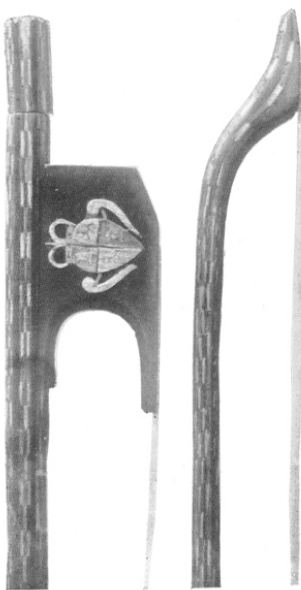
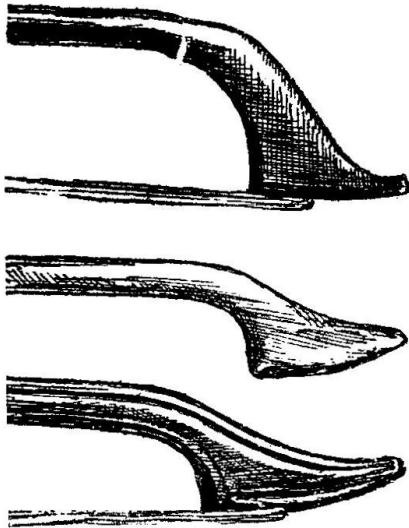


写真 I

写真 I は特に興味深い弓です。前期の例のようにこれは伝統的なナットと反りを持っています。装飾の点でユニークです。シャフトにはフルート加工だけでなく、微細な赤、黄色、茶色のモザイクが施されています。見たところ、一時流行した麦わら細工を思い出させます。ナットの片面にはスペイン王家の紋章が見られ、裏面には王室の組み合わせ文字があります。

アルフレッド・ヒル氏はこの弓を苦労してマドリッドで入手し、その由来はもともとストラディバリがスペイン王室のために作った楽器に属する

ことをつきとめました。この弓がクレモナのあの栄光ある工人の作である可能性もありえます。全長は27½インチ(70cm)、毛の有効長は23¾インチ(59cm)、毛の幅はたった1/4インチ(6mm)です。これまで見られた中で一番はっきりした反り(訳注:原文は most scientific cambre です)を持っており、26%インチ(68cm)に対して9/16インチ(14mm)です。また材料は他の弓よりもしなる材が使われています。



26 図の真ん中の弓はトマス・スミス Thomas Smith 氏のスタンプが押されています(やっと製作者名のサインがあるサンプルにたどりつきました)。彼は、主にチェロ弓で知られています。しかし、これはエドワード・ドッド Edward Dodd の作である可能性が高い。ヘッドは優雅さにはありますがかなり古いデザインです。材は黄色のランスウッドで、はっきりとキャンバーがあります。27½インチ(70cm)に対して反りはほぼ1/2インチ(13mm)あります。全長では28¾インチ(73cm)で、ヘッドとナットのほぞ孔から推測すると以前のサンプルよりも毛の幅は広くなる意図だったと思われます。

図26

作られた日付は1760年から1780年の間です。26 図の他の弓はビオラ・ダ・ガンバ弓です。上の弓は私がガンバの曲を弾くときに使います。なかなかエレガントで、おそらくフランス製と思われる。これはかなり柔らかく、シャフトと毛の間が広くて真ん中の弦に噛まないのので3音の和音を弾くのに適しています。しかし、これらの古い弓全般と同様に毛がかなり狭く張ってあります。26 図のもう一つのガンバ弓はとても風変わりでかなり古いもののように思えます。上部の三分の二は見事にフルートしてあり、下の三分の一はシンプルな八角形です。変わっているのはスティックと毛の間隔がヒールのところでは1インチ(2.5cm)もあって先端

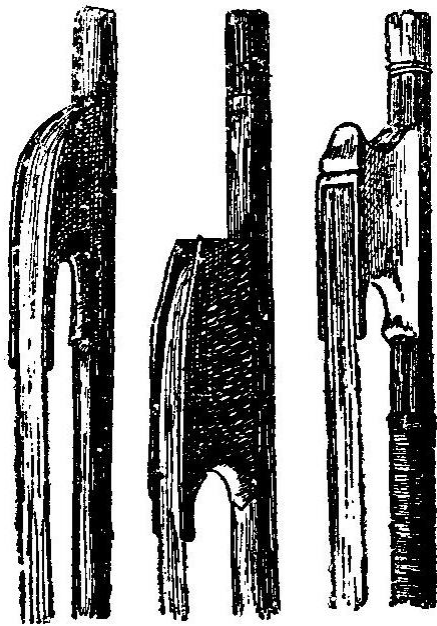
では2分の1インチ(1.3cm)まで狭まっているところです。シャフトには少し反りがありますが、スネークウッドなので暖炉の火かき棒のようにがっちりしています。



これらの弓の年代を正確に特定できないので、可動式のナットがいつ最初に使われたのかを断言することはできません。フェティスはこの重要な改良も東洋から来たと考えており、彼が持っているバグダッドで作られた桜材の弓はヘッドでは毛が挿入されてナットはスティックに「ありつぎ dovetail」で装着されています。

図25の最初と2番目の弓はかわった作りになっています。毛は両端でスティックに固定されており、完全に取り外せるナットは溝にカチッとハマって、毛の圧力でその位置に固定されるのです。図27を見ればこの仕組みが理解できるでしょう。

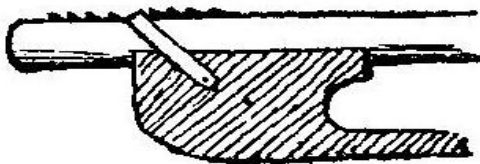
図27



これらのナットは図28の 2 番目と3番目です。サイズは実寸の3分の2に縮小されています。(訳注:デジタルファイル経由の翻訳なので、もとのイラストの実寸は定かではありません)

真ん中の弓の端飾りはいかにもスクリューがついているように見えますが、これは通常はラッピングが施される場所を、すぐ上のスティックの見事なフルート仕上げとバランスをとるための単なる飾りです。

図28



これの大きな改良点は図29のようなぎざぎざが付けられて毛のテンションをそこそこ満足なほど調整できることです。この機構はスエーデンでは依然として使われています。

図29

回転するネジで調整できるナットの発明はトルテ(兄)によるとされていますが、ヒル氏の弓コレクションの中の何本かを見るとこの結論にとびつくのは早計なように思えます。この点は残念ながらいつものように謎につつまれています。



写真Ⅱで、モダン弓に近い作り方が見られます。これらは、イギリスのバイオリン製作者やディーラーのために弓を作ったW. タブズ W.Tubbs のものだと思います。最初の弓はノリス&バーズ Norris and Burns の刻印があります。この弓の長さは27⁷/₈インチ(71cm)で他の二本はちょうど1インチ(2.5cm)長い。1本目と3本目の毛幅は4分の1インチ(6mm)で2本目のものはたつぷりと16分の5インチ(8mm)あります。この弓のきれいなナットは図28に描いてあります。これらの弓はとてもエレガントで、仕上げと反りはモダン弓の性格をかなり持って居ます。ただし反り加減はまた小さすぎます。

写真Ⅱ

第5章 ヴィヨームの要素—フェルールとスライド—ジョン・ドッド

VUILLAUME'S FACTS—THE FERRULE AND SLIDE—JOHN DODD.

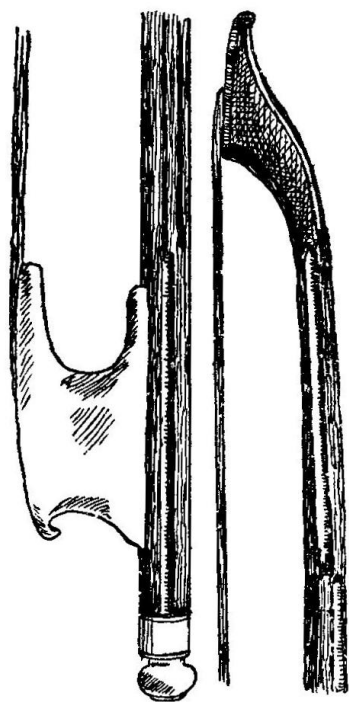


図30

装飾だけでなくしっかりした反りとネジ式のナットをもっているのが注目すべき弓が図30です。これは17世紀のクレモナ製の弓です。これは部分により交互にフルート加工されており手元よりの3分の1の部分にはさらに巧緻な細工が施されています。本当に、こういう昔の偉大な職人達は手間を厭いませんでした。ネジ式のナットは毛にほんの少しの余地を残して望みうる完璧な作りです。

ネジ式のナットをもったこれらの初期の弓は、毛の張りを調整してシャフトの弾性を保持するための機構を発明したのはトルテ兄であるという一般的な認識をただす十分な証拠でしょう。

バイオリンと弓の歴史について書く人の大半は、頻繁に引用される歴史家で科学者のフェティスの資料を参照するだけで満足しています。

彼は多くの重要な論述を、ヴィヨームをよりどころにして書いたようです。ヴィヨームがバイオリンの歴史についてどうやって精通したのかははっきりしません。「きつすいの」クレモナ製やその他の名作を作る才能はよく知られていました(訳注:ヴィヨームはストラダなど名器の贋作を作ったことで有名)。彼がバイオリン界におしつけた最も

なみはずれた成功例はデュイフォプリユカール Duiffoprugcar の楽器でしょう。彼は同様に歴史の事実をでっちあげることにも長けていたとみなしていいのでしょうか?「死者をそしるな」(ラテン語の確言)と言いますが、歴史については万難を排して正すべきです。いかがわしい叙述ならない方が良くとおもうのです。

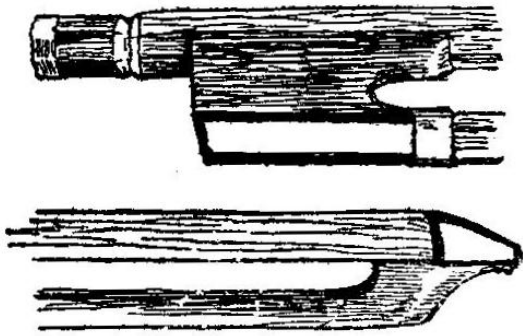


図31

トルテの真似をしたのではないように思う理由を申し上げます。全てはミステリーの中です。他の科学や芸術の分野でも才能ある思索家たちが並行して同時に同じ結論に達する事例があります。(注目に値するこの種の例としてはアダムスとルヴァリエの推論による海王星の同時発見があります)。良い弓を作ろうとしたときに、あきらかな工夫であるフェールとスライドが、完璧を目指す複数の職人によって工夫されたであろうことには確信を持てます。

31 図の弓の特徴としてご注目いただきたいのは、ナット下部の全体に比べてスライドがとても大きいことです。他の製作者の弓に比べてとても小さな余地しかありません。これは彼の純正のサンプルのほとんどで見られます。残念ながらナットは消耗しますし、新しいものに取り替えられることもあるので必ずしも全ての弓にオリジナルの部品が残っているとは限りません。ドッドは時折図31に見られるように、装飾に螺鈿(真珠母貝 mother of pearl)を使いました。彼は常にナットの側面とシャフトの側面に大きなはっきりした文字でDODDとスタンプを押しました。私はJ. Doddと押してあるのを見たことがありますが多くはありません。

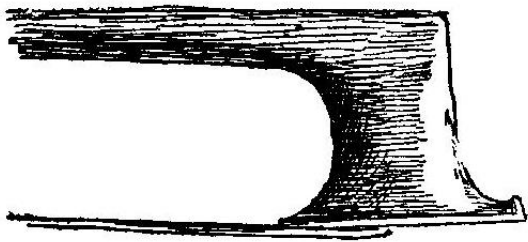


図32

スクリュー (ネジ) の取り付けについて述べましたが、弓にとって次にくる重要な改良は毛をリボン状に保つ「フェール」と、毛を固定する溝を装飾的にカバーする「スライド」です。これらの改良は、一般的にフランソワ・トルテによるものとされていますが、図31でこの両方の改良を備えたジョン・ドッド John Dodd の典型的なナットを図示します。トルテとドッドは同時代人です。トルテは1752年のドッドより5年早く生まれました。後でトルテ

32 図(実寸 : 訳注: デジタルファイルのコピーなので、読者をご覧になるサイズは実寸ではありません)はかなり初期のドッドのもので、私が思うにこれ以上ないほど不格好です。この作者による次頁の写真Ⅲと写真Ⅳのような弓を作った同じ人の手からこのような漫画じみたものが作られたとは驚きです。

写真Ⅲはこの作者によるバイオリン弓2本とテナー弓一本。写真Ⅳはテナー弓1本とチェロ弓1本。ドッドの弓はとても個体差が激しいので、彼の弓の特徴を全て述べるのは不可能です。そのため、私は彼の最高のサンプルを選びました。これらの仕上げは特に素晴らしいものです。2番目と3番目ではドッド弓でしばしば見られるネック部でのアーチの傾向が見られます。他の弓ではヘッドに到るシャフトの流れが完璧です。

彼のチェロ弓は彼の最高傑作で、大陸の最良の製作者たちのものに比べて遜色がありません。ここでは彼の最盛期のものを選びました。



写真Ⅲ

写真Ⅳ

テナー弓2本のうちの最初のもの(写真Ⅲの3番目)が一番よく見られるタイプで、ものによってはヘッドが不格好に後退しています。ほかのものでは写真Ⅳのチェロ弓よりもさらに前傾しています。

ドッドの弓はその極度の優雅さと、最良の作品に見られる技術の粋によって「イギリスのトルテ」とも称され、イギリスの大半の好事家の間では最高の評価を受けていました。しかし、実際にはドッドの弓でこの評価にあたいするものは多くはありません。1ポンドから30シリングで売られた彼の最上級の弓は結構なものではありますが、バイオリン弓では芸術家が好んで用いるほどのものはあまりありませんでした。

しばしば行き過ぎたスマートさの結果ヘッドが狭くなり多くの場合、毛に十分に力を配分できませんでしたし、多くの弓が短かすぎました。

ドッドはイギリス国外からの楽器や弓の輸入によってイギリスの楽器メーカーが壊滅的な打撃をうける以前に働いていたことに留意する必要があるでしょう。彼は数シリングから一桁上の価格帯までの大量の弓を作りました。ですから、ドッドのオリジナルの弓であっても見るに値しないものも多くあることは自明でしょう。彼のテナー弓はしばしばすばらしいもので、上記のようにチェロ弓は彼の最上の仕事です。

第6章 セレ博士によるドッドの思い出-彼の仕事と困窮-ドッドとトルテ-フェティとヴィヨームの計算

DR. SELLÈ'S RECOLLECTIONS OF DODD—HIS WORK AND POVERTY—DODD AND TOURTE—THE CALCULATION OF FÉTIS AND VUILLAUME.

熟達のバイオリニスト、リッチモンドのセルレ博士にインタビューできたのはとても幸運でした。この紳士は現在80歳代後半で、ジョン・ドッドととても親密な関係にあり、ドッドについての興味深い細部にわたる話をたくさん教えてくれました。

ドッドの肖像画をさがしたのですが、その類いのものは何も残っていないようです。しかしセツレ博士がドッドの風貌を説明してくれました。体格は小柄でせかせかと小股で歩いていました。下着はほとんど着ておらず、つば広の帽子をかぶり、服装にはまったくこだわらなかったのが、彼の見かけは風変わりで、時に常軌を逸していました。残念なことに彼は無学で、セツレ博士によると自分の名前さえ書けたかどうか疑わしいとのこと。こういった環境を考慮すると彼の作った弓は驚くほど洗練された芸術性を持っていました。彼は秘密主義で弟子をとりませんでした。彼の手法は誰にも知られたくないし、後継者もほしくなかったようです。かつて彼の秘密の技法を千ポンドで買い取るという提案があったそうです。それは彼の困窮度合いからすると大変な魅力だったはずですが、彼は断固として断りました。

セツレ博士はドッドが変わった形に作られた両刃のこ(curiously constructed double saw)で原木から弓を切り出しているのをはつきり覚えています。他の弓製作者たちは誰もこんな道具は使っていないし、そんな可能性も考えられないと言っているの、注目に値する点でしょう。このことが、とかく噂される「ドッドの秘法」と関係があるかどうかはわかりません。これもたぶん弓の歴史の中で謎に包まれたままの運命にある多くの事の一つなのでしょう。

セツレ博士の記憶では、ドッドはしばしばさまざまな屋台からもらってきた蛸殻でポケットをいっぱいにして家路についていました。これらの蛸殻からよくスライドなどの飾りにする真珠片を切り出していました。彼の弓の装飾がシンプルである要因でしょう。しばしば部品に使う銀が買えませんでした。男の子(訳注:セツレ博士の幼少のころのことでしょうか)にとっては年配の家政婦がドッドが銀のさじをまた1本溶かして使ったと徹底的にこきおろすのを聞くのはとても面白い経験ではありました。

ドッドの足を引っ張ったのは彼の飲酒癖でした(partiality for the “flowing bowl.” 訳注:「Flowing bowl」は1891年にイギリスで発行されたカクテルやビールなど酒類のレシピ本)。博士がA. ヴィダールへ与えたメモで警句的に述べたように「彼は変則的である点についてとても規則的でした」。この点についてのヴィダールの翻訳は注目に値するでしょう。

ドッドが毎日4回も“les voitures et chevaux publics”(公共の馬と馬車)に通っていたという話は驚きです。この奇矯なイギリス人が、国民性とはいえ馬への愛情に駆られてその時代の乗合馬車を毎日何度も検分したとは思えないのです。ドッドの行きつけの店がコーチ&ホーズではなくスター&ガーターだったらヴィダールが何をしたかなどは考えたくもありません。

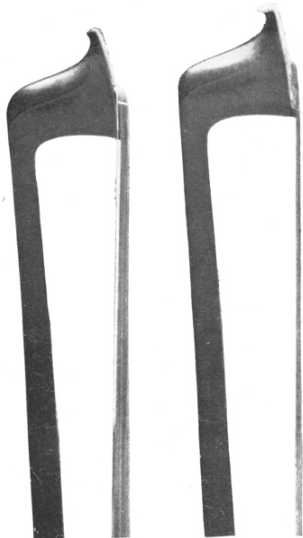
(訳注:この前後の文章は直訳すると支離滅裂な話になります。前段の飲酒癖の話から推して、ドッドが通った「coach and horses」も「star and garter」もパブ/飲み屋と判断しました。浅学にははっきりした傍証は確認できませんでしたが、どちらも当時のパブとしてありそうな名前です。確かに、日に4回も飲みに行っては職人として成功はしにくいでしょうね。)

彼は晩年には極度の貧困に陥り、彼の天才を惜しんだ数人のバイオリニストやアマチュアの慈善にすがって暮らすようになりました。最後にはリッチモンド救護院の診療所で気管支炎のために亡くなり、ほかで言われているようにリッチモンドにではなく、キューに埋葬されました。

彼のような無口で打ち解けにくい性向の人が他の製作者の作り方を安易に真似するとは思えません。これまでにご紹介した弓に見られるように、モダンデザインのヘッドに近づいていく傾向が一貫して見られました。トルテのヘッドは疑いなく最も美しくあらゆる点で完璧です。他の者が達成しようとしていたことを完成した技術の粋なのです。一方、ドッドは、私の見るところではまったく孤絶して働きながらそれに非常に近くまで来ていました。前出の写真ⅢとⅣのドッド弓を写真ⅤとⅥのトルテ弓を比べるとあきらかな違いが見られます。ドッドの仕事は、それ自体見事なものですが、本質的に彼の偉大なフランスのライバルのものより以前のものに見えます。それでも、彼らは同時代人なのです。細かく言うとドッドはトルテより数年後でした。

さて、上ぞりについてお話ししましょう。ドッドは以前からのやり方に従って、最初から必要な曲線を切り出しました。一方、トルテは寸法とデザインを完璧にしあげることに加えて、科学的な考察に基づいて全く新しい作り方を加えました。彼の弓はすべて、まず最初に真っ直ぐにカットされ、木の繊維に適宜熱をくわえて曲げることによってスプリングをつけたのです。このドッド／トルテの関係についても一つ考慮すべきことは、当時のイギリスとフランスの関係です。多くの方がお認めになるとと思いますが、この時代のイギリスとフランスは緊張関係にあり、2国間の自由な交渉には多くの障害がありました。

フランスとの間の戦争はドッドが21歳のときに勃発しました。トルテは5歳年上ではありましたが、トルテは若いときにまず弓づくりとはまったく関係のない職業につき、さらに、後に「フィドルスティック」と称される魔法の杖を使う全ての人から尊崇されるようになる完成品を作る前にかかなりの長期にわたって試作を重ねました。

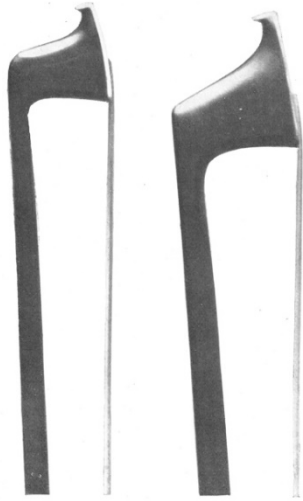


写真Ⅴ

この時代に、このような物がパリからロンドンまで移動する時間を考えるとドッドは彼が60歳になるころまでトルテの弓を見ていない可能性が高いように思われます。トルテの良い弓はなんとすばらしいでしょう！初めてそれで弾くときの驚き！私がストラドのバイオリンをトルテの弓で弾く機会があったとき、どちらがより私の歓喜を呼び起こしたのか決めかねました。

はっきりと定義はできませんが、トルテには奏者の弓使いを極限まで高めるなにかがあります。特定の弓をいかに使い慣れても、また奏者がスタッカートやアルペジオのフレーズをいかに熟練して弾きこなしたとしても、一度トルテを試せばたちどころに最初にトルテを試したとたんに、これまで

はなんらかの努力が必要だったことに気がつきます。一方、いまや弓自体が意志があるかのうに奏者を自然に助けてくれて、難しさは魔法のように消え失せるのです。あたかも弓自体の意志で、奏者の願い



写真VI

を物理的な介在無しにかなえてくれるように感じられます。それは郊外のハムステッド・ヒースをロバに乗って横切ったあと、ハイパークのロウン・ロー（訳注：19世紀上流階級の乗馬場として有名だった）をサラブレッドで駆けるのに似ています。いや、私や読者のみなさんがそんな悲惨で野卑な運動をしようというわけではありませんが、充分説得力のあるたとえだと思えます。弓としての機能も素晴らしいのですが、工芸品としても実に並外れています。写真VとVIのヘッドをご覧ください。輪郭のなだらかな曲線、力強くありながら繊細です。また、調和のとれた内側のしっかりしていながら優雅さをたたえたラインによって支えられています。弓のエキスパートになるには何年も継続して観察を続けるひつようがあります。線の微妙な違いは常に研究観察を続けている人以外が違いを認めるにはあまりにも微細です。しかし

なつかしのロジャー・ノースが言ったように「才能がこれっぽっちもない人」でさえも写真Ⅲ、Ⅳと写真Ⅴ、Ⅵのヘッドの違いは感じていただけるでしょう。類似を最も感じられるのは二つのチェロヘッドです。しかし、そこでもドッドの弓では、ほとんど拙いと言えるほどの不必要な量感が感じられます。一方でトルテは軽快で力強さと勢いを感じます。これ以前の弓ではたいがい不活発な印象をうけますが、トルテは目覚めており、いきいきとしています！

偶然の細糸のために重大な結果が変わるのを見るのはとても興味深いことです。トルテの一族を例にとってみましょう。トルテの父は、りっぱな弓職人で、同時代の誰とも同じぐらい、多分より良い弓を作っていました。彼は自然に長男を自分の職業へと教育し、おそらく彼に名声をもたらしたデザインと仕上げを受け継いでくれると期待しました。下の息子のフランソワのことも忘れていたわけではありません。フランソワが食べていける有用な仕事をあてがおうと、時計職人の道が適していると判断しました。運命はなんと頼りないものなのでしょう。

大きな期待を受けた長男は、大きな成果はもたらしませんでした。彼の弓は父親の弓よりあきらかに劣っていました*。一方でフランソワは実り少ない金属磨きを8年我慢したあげく時計職人の仕事に飽き飽きして、弓作りの家業に目を向けました。

* 原注：兄トルテによる数本の良い弓は、彼の弟が成功を収めたやり方を見習って作られたものと思えます。

彼は、ドッドと同じようにまったく教育を受けていませんが、すばらしい観察力と判断力を持っていました。この時代にバイオリンの演奏は日々に目立って評価されるものになっていきました。偉大な演奏家たちは音楽のキアロスクーロ（明暗法）を理解しはじめていました。表情の付け方を習得していました。バイオリニストたちは皆、ド・ベリオが彼のバイオリン学校で定めた「人間の声が、全ての楽器演奏の純粋な鋳型である」という偉大かつ単純な法則の認識を持っていました。

バイオリンは熱情であれ優しさであれ、唄の全てのニュアンスを模倣できることがわかりました。演奏家達は奏者の情感に舌のように敏感に反応してくれる弓を熱望しました。ご婦人の耳にそっと

やさしくささやくかと思うと進軍ラッパのように轟きわたり、同時に奏者の意志に応じていかなる媚態や饒舌にも対応してくれる弓です。これが飢えかけた時計職人のフランソワ・トルテが与えてくれた弓なのです。我々バイオリン弾きは、パリの時計職人の親方達が徒弟たちに対して気前よくなかったことに強く感謝をしなければなりません。

彼は文盲ではありましたが、弓作りの勘所とかかわる理屈をたちどころに理解して、彼に露呈されたさまざまな問題を解決する試作にコツコツと取り組み始めました。

道具の扱いに習熟するために、古い樽の板で無数の弓を作りました。それより良い材料を買うお金はなかったのです。実際の作業に十分な技量を身につけたと納得したとき、材料の検討に入りました。あらゆる木材を試した結果、当時ヨーロッパに染料として大量に輸入されていたペルナンブコが最良と判断しました。当時、英仏戦争のために貿易が深刻に妨害されていたので、この材料の十分な量を手に入れるのはとても難しく、価格が異常に高騰していました。また、この木の性質も弓作りにとっては難しいものでした。節目やひび割れがなく、使い物になるほどまっすぐな木目が通った、1本を見つけるには何トンもの丸太や棒きれを調べねばならないかもしれません。しかし天与の才能ときりのない苦勞に耐える度量が全ての困難に打ち勝ち、いまやクレモナの最高傑作にふさわしい弓を手にすることができるのです。天才のひらめきは凡才の努力家にはほとんど理解できません。突如あらわれるインスピレーション、天才にとってさえ必要な手作業に先立つ瞬時の要点の把握は理解できないのです。

絶え間ない努力だけ、または天才のひらめきだけではどちらも充分ではありません。この二つの素質が完璧なバランスを持って組み合わせられて初めてあの偉業が遂げられるのです。トルテはこの組み合わせの顕著な事例です。彼の天才をもって自然に必要な要素を見つけ出し、彼の忍耐をもって完璧な弓を作り出すことができました。彼こそが1775年以前には定まっていなかった弓の長さ、重さ、バランス、良い「アタック」を作るために必要な毛の角度、毛の幅と長さなどもろもろの要素を最終的に決定づけたのです。

トルテが決めた平均的な長さは、バイオリン弓で74cmから75cm(29.134 から 29.528 インチ)。ピオラ弓74cm(29.134 インチ)。チェロ弓72から73cm(28.347 から 28.740 インチ)です。多くの人が弓のナットにはめこまれた銀や金の板はただの装飾だと思っています。しかしそれは芸術作品では当然かくあるべきように実用目的が第一義でした。余計な装飾は芸術家の目には美しいとは映りません。ヒール部に取り付けられたこれらの金属の「重り」によってヘッドの重さとバランスをとり、正確な重心がとられました。

バイオリン弓の重心はナットから19センチ(7.48 インチ)、チェロ弓ではナットから175から180ミリ(6.89 から 7.087 インチ)としました。(訳注:バイオリンはセンチ、チェロはミリで表記してあるのは原文のままです)

トルテ弓の寸法については、フェティスによるストラディバリの解説をビショップ氏がうまく訳したものの以上のものは私にはできません。

「中くらいの弓の、ヘッドまでの長さは0.700メートル(27.56インチ)です。」

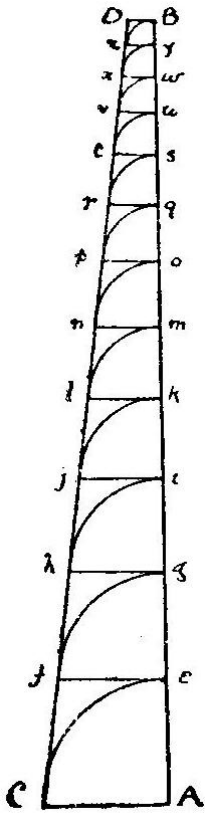


図33

「まず、円筒形、または角柱状の部分があり太さは一定です。この部分は0.110メートル(4.33インチ)あります。この部分が円筒形であれば、直径は0.0086メートル(0.34インチ)です。」

「この円筒形(または角柱)から先はヘッドまで細くなっていきます。一番細いところで0.0053メートル(0.21インチ)です。これで両極端の差は0.0033メートル(0.21インチ)。そこから、スティックは円筒形部分から先は0.3ミリ(0.012インチ)ずつ細くなる10の部分で構成できます。膨大な数のトルテ弓を検査して、これらの10点は同じスティックの縮小寸法で常に見られるだけでなく、明確に距離は同じで別の弓どうしを比較しても点の状況は同一でした。」

ヴィヨーム氏はこの10点の位置は確実に位置だしできるように計算によって求められないか、また同時に弓が常により状態で作られるようにできないかと考えました。

経験的に(演繹的に)彼は下記のようにして求めました。右端の線 AB は0.700メートル(27.56インチ)で弓の長さにあたり、円筒部の長さにあたり直角に AC の線を引きます。0.110メートル(4.33インチ)。同じ線のもう一端 B で長さ0.022メートル(0.866インチ)の直角な BD を引きます。これらの直角にひいた線の端をつなぐと、AB 線と CD 線は互いにある角度で片寄っています。

縦座標 AC 長さ0.110メートル(4.33インチ)をコンパスでとって AB 線の上で A から e の点をとってください。この縦座標 e 点から AC 線に平行に CD 線までの横線 ef を引きます(AB 線に直角です)。これらの二つの縦座標線 AC と ef では(必然的に後者が前者より短い)間に円筒形部分があります。その直径は前に述べたように0.0086メートル(0.34インチ)です。次ぎにさきほど得られた ef の長さをとって前同様に AB 線の上で fg をセットします。g 点から3番目の座標線 gh を引く。その線の長さは同様に AB 線の上にとって新しい i 点を取る。そこから4番目の座標線 ij をとる。その長さは同様に AB 上で5番目の座標線 kl の位置を決めます。後者は同様にして6番目の mn を決めて同様に他の点も決めながら最後の yz まで行きます。こうやって e 点に始まって得られた g i k m o q s u w y は弓の直径が順に0.3ミリずつ細くなる点です。さて、これらの点は同じ点から引かれた連続して短くなる座標線と e 点から B 点に到るまで漸次短くなる座標線の距離で決まります。「これらのデータを計算式にあてはめるならば弓の形状は対数曲線で表されることがわかるでしょう。縦座標は等差級数にもとづき、横座標は等比数列によります。また、曲がり具合は下記の等式で表されます。」

$$y = - 3.11 + 2, 57 \log. x,$$

ここで x を175から165まで10分の1きざみで入力すると対応する y の値は基軸の対応する位置の弓の断面の半径になります。

第7章 ルポー、ペカット、偽のスタンプ、パノルモ、W.J.B.ウールハウスの計算

CHAPTER VII.

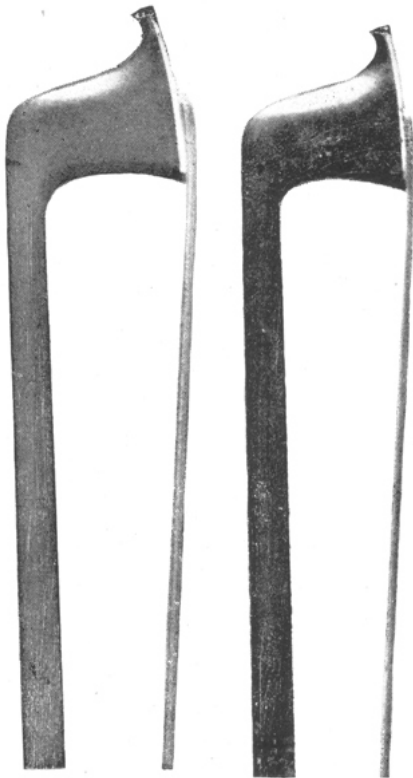
LUPOT—PECCATTE—SPURIOUS STAMPING—PANORMO—W. J. B. WOOLHOUSE'S CALCULATIONS.

弓の歴史の中で傑出した二人の弓作者、ドッドとトルテについて詳しくお話をしました。さらに大小の弓作者に触れる前にペカットとルポーについてもお話したいと思います。彼らの才能がトルテに劣るのは、創始者ではなく追隨者であったという点においてのみでした。

フランソワ・ルポーはバイオリン製作者のニコラス・ルポーの兄弟です。フランソワは弓作りに集中し、彼の最良の弓は多くの人からトルテと同等とみなされました。しかし残念ながらルポーの弓はかなり品質のばらつきがあります。あるものは素晴らしく、あるものはよくないのです。これは弓を買おうと思っている人達に知ってもらって知らしめすぎることのない点です。天才が作ったという証明だけでは良い弓を求めたい人にとっては充分ではありません。購入者が必要な知識と経験が無い場合は、常にまず判断力があるという評判が高い人に実際の品質を評価してもらうべきです。多くのルポーの弓には「LUPOT」と時には2～3ヶ所にスタンプが押してあります。しかし彼自身がこれをやったかどうかには疑いがあります。これは製作後ディーラーによって押されたと一般にみなされています。これはトルテのスタンプがある数本のものについては、彼は決してスタンプを押さなかったことが確認されているので確実にディーラーによるものでしょう。トルテが弓に刻印したのは2例だけ知られています。どちらも下記の銘が描かれた小さなラベルが溝に張られていました。

“Cet archet a été fait par Tourte en 1824, âge de soixante-dix-sept ans.”「この弓は1824年、トルテが77歳の時に作られた」

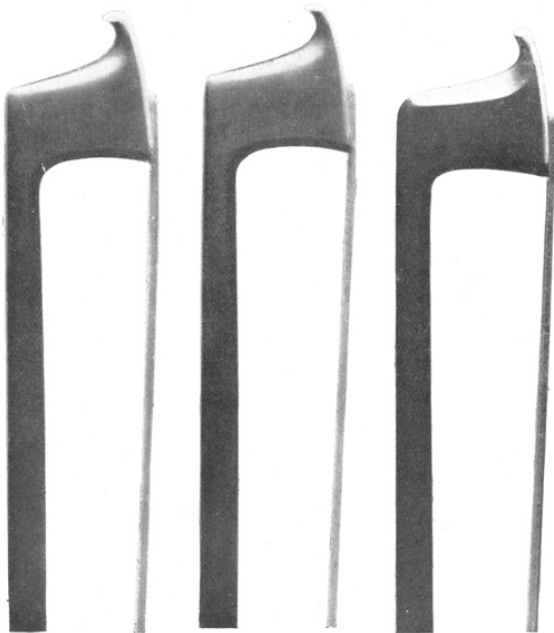
ルポーによって加えられた重要な改良は、スティックとの摩擦でナットが摩耗するのを防ぐためにナットの溝に張られた金属板です。



写真VII

写真VIIにルポーの作例を二本掲げます。ここではトルテの優美さをすべて備えていますがその力強さを欠きます。この二本のできればは最高で、さらにバランスもコントロールも効いて柔軟性もよく、使うことに喜びを感じさせてくれます。これはしばしば弓について見過ごされることです。多くの人が柔軟性だけが主な要件だと思っており、私に見せられる弓はしばしばインドゴム製のように、オーナーは私がほめそやすと思っているようですが、私の目には重大な欠陥と映ります。実際問題として、柔軟性と順応性(flexibility and pliancy)は弱さにつながるもので弓の主な特製としては正しい定義ではありません。本来意図するところは弾性(elasticity)なのです。それは圧力に応じて曲りながら、しかもすみやかに常態にもどります。

弓を試している演奏家がときおり「この弓は元気すぎる」(too much “life”)というのを耳にします。そこで意味するのは演奏者がコントロールできないほどのアクションがあるということで、通常は過度のフレキシビリティによることが多い。



写真VIII

写真VIIのルポーの弓に対比して、ドミニク・ペカットの弓を写真VIIIで見て下さい。ここでは最大限の力強さとエネルギーを感じられますが、ある種の優雅さも兼ね備えています。極度の角張った外線もドッドの弓よりも目に優しい。

ペカットはフランソワ・トルテのように最初は彼を後に有名にした弓作りとは縁の無い職業についていました。彼の父はドミニクが1820年に生まれた時はミルクールの床屋でした。カミソりを扱うのが性に合わなかったようで、その町の主要産業(弦楽器作り)に身を投じてバイオリンと弓を作り始めました。特に弓作りで抜群の頭角を顕しました。

1867年にJ.B.ヴィヨームが才能のある職人を探しており、当時ミルクールにいた彼の兄弟に相談の手紙を書きました。その結果、ドミニク・ペカットはパリに行き、ヴィヨームの所で11年間仕事をしました。1837年にフランソワ・ルポーが亡くなり、ペカットがその仕事を引き継ぎました。さらに10年後彼は故郷に帰りましたが、パリとの連携は1874年に死ぬまで続きました。彼の弓の多くはスタンプが無いが、または Vuillaume のスタンプがあります。しかし PEGGATTE と押されたものも多く、なかにはシャフトの反対側に PARIS と押されたものもあります。ある例ではスタンプが「T」1文字だけであることから多くの混乱が起きました。多分、作者が文盲であったためでしょう。

写真ⅧのⅢ本目はパノルモの弓です。彼の弓は他の作者のものとはっきり違います。しかし、法外に単純な形だからといって見捨てないでください。平坦な側面と角度のついた切子面には理屈があるのですから。単純に、八角スティックの自然な延長なのです。

かけがえのない「フィドルスティック」をこのような完成度に高めたフランスの製作者と科学者に負うところは大きいのですが、我が国人のある人達がこの芸術分野でも貢献したことを見過ごしてはならないでしょう。

数学者でかつアマチュアの音楽愛好家でもあった故 W.B.ウールハウスはフェティスと同じぐらいに弓の重要な特性を、特に製作者のために明らかにしました。ウールハウスは同学の多くの人が見過ぎていた点、つまり弓でも成功するにはバイオリンと同じように振動体としての純粋さに大いに依存するということを強調しました。弓が全長の重さと形状にわたって完全に一体となって振動するように調整されていなければ芸術家にとって使い物になりません。

弦の仕上げが不均等な場合と同じようにしばしば弓でも「フォールス」なことがあります。通常の間ではわかりませんが、完璧な「スタッカート」を端から端まで演奏することは不可能です。もし弦のうちの1本が全音域にわたって完全な円筒形を保持していなければ完全5度をを得るのは不可能なのと同様です。特にスタッカート奏法について話すのは、おそらくこの奏法がほかのどの奏法よりも弓が均一でない場合に影響を受けるからです。しかし特に機敏に動く必要がある場合はどんな奏法でも弓の性能の悪さを目立たせるでしょう。

ウールハウスの計算をフェティスの計算と比べてみるのはとても面白いと思うので、ウールハウスの結果を下記に述べます。

「寸法がインチで採寸されていて、 h が弓のどの部分であれヘッドからの距離を示す場合、その部分のスティックの直径は(シャフトは丸いと仮定して)下記の式で計算できる。」

$$\text{Diameter(直径)} = .2 [\log.(h + 7.25) - 9.8100]$$

「下記の表の右端列はこの式で計算しました」

弓のヘッドからの距離(単位:インチ)			
Violin	Viola	Violoncello	Diameter in parts of an inch.
0			.210
2	0		.230
4	1½	0	.247
6	3	1	.262
9	5	3	.280
13	8	5½	.300
18	11½	9	.318
23	15	12	.333
	19	16	.348
	23	20	.360
		24	.370

これらの数値は円柱状の部分のみにあてはまります。

ウールハウスは上記の数値によって小さな象牙の定規をつくり、弓をチェックする場合にとっても役に立ったといいます。上記の計算で得た数値は中ぐらいの密度の木材にあてはまります。彼は「つまって密度の重い弓では数値はいくぶん小さくなる。または同じことなのだが、ヘッドからの距離を2分の1から1インチ伸ばしても良いかもしれない」と言います。

それから彼はバイオリン、ビオラ、チェロ弓の重さの表を提示しました。

	弓の重さ		
	Violin	Viola	Violoncello
	grains	grains	grains
Light	850 55.1g	1,000 64.8g	1,150 74.5g
Medium	900 58.3g	1,050 68.4g	1,200 77.8g
Heavy	950 61.6g	1,100 71.3g	1,250 81g

訳注: 1grain は約0.0648グラムとして上記の斜体の数値を補記しました

弓のスプリングまたは反りの調整について、ウールハウスは正確なカーブの出し方を解説していますが、私には充分頼りになるようには思えません。「適切な大きさの真っ直ぐな補助弓を作ります。それから通常のやり方で毛をはってスクリューを巻きます。それで、他の弓をセットすべき正確なカーブが倒置した形で得られます。」

「通常のやり方で毛をはってスクリューを巻く」というのはあまりにも自由度が高すぎて、どの程度まで張ってよいか定義されていませんし、それを製作者の判断に任せるのなら反りも製作者の判断に任せて、真っ直ぐな補助弓を作らずにすませれば良いように思えます。

次に、弓製作者の名前をアルファベット順で列挙します。なるべく完全に網羅したつもりです。故人製作者を優先して、「工場」メーカーは除きました。リストのなかには、実際に自分で弓は作らなくとも彼らの名前を冠した弓を注意深く監修して作らせている物もあります。こういった弓は、外国の工場に大量発注して作らせて名前のスタンプだけ押す弓とはまったく違います。見かけはとてもきれいで、若い女性のアマチュアには魅力的に見えますが、残念ながらバランスやバネが悪く、またバネが多少あってもすぐに無くなるというタイプの弓があります。ご覧になるような極端に安い値段で充分使える弓を提供することはどんな工場にも不可能です。弓が実際に使い物になるレベルのものであるには、素材と技術とフィッティングが最良のものでないといけないということをご理解ください。

第8章 弓製作者のリスト

A LIST OF BOW MAKERS.

訳注:この資料が書かれた頃(1922年)としては最新のものとはいえ、この翻訳の年2015年にはリストにある弓作者は誰も活動していないと思われます。個々のコメントにはおもしろいものもあるかもしれませんが、今回の翻訳としては先を急ぐために原文のままの掲載にいたします。興味の有る方はぜひ目をおとしてください。

この弓製作者リストでこの小文の「歴史的な」部分は終わります。すでにご説明したように、弓の完全な歴史を著すのは不可能で、私としてはこれまで集められた資料を読者の前に開陳するにとどめます。種々の矛盾する記録の存在から一つだけの結論を選ぶのは不可能なので、弓の発達史について自分自身の意見は差し控えるように努めました(見つかった証拠から、明白な結論づけが強いられない限りにおいてです)。

現在我々が知っているような究極の弓に向けて収斂していく、さまざまな要素が働いたように見られます。弓の進化について、私が明快な解説ができていないとしたら、以前の他の筆者がしたように不都合な細部に蓋をするようなことをしないですんだということを意味するでしょう。

これは、小さな男の子が砂の城を作りそこねたので彼の遊び仲間の立派なお城をこわすことで自らをなぐさめようとするような意図で書かれたのではないとご理解いただければ幸いです。

A noticeable feature in the following list is the great preponderance of French makers. Curiously enough the list of bow makers commences with:

ADAM, JEAN DOMINIQUE. He was born at Mirecourt in 1795, and died at the age of sixty-nine. He is said by some to have been the son of one Jean Adams, a bow maker of the eighteenth century. How far this may be true is impossible to say. The difference in the spelling of the name may not be a great matter, but there is no explanation forthcoming. The majority of his bows are very commonplace, but occasionally he "made an effort" and produced something out of his ordinary run, and these he invariably stamped ADAM. Of these the octagonal sticks are most highly prized.

ALLEN, SAMUEL. Born in Cornwall in 1858; was originally intended for a schoolmaster. Worked at several mechanical trades and being musical, he naturally turned his attention to fiddles, and ultimately, bows. Messrs. W. E. Hill and Sons employed him as a bow maker for several years. Although he held a high position in their workshop his independent nature was not satisfied until 1891, when he set up in business on his own account as a violin and bow maker and repairer.

BAROUX, Paris. Early half of the present century. Occasionally made some very excellent bows, but the general average of his work is only moderate.

BAUSCH AND SON, Leipsic. Middle of present century. The bows issued by this firm are valued highly in Germany. They are well made and, as a rule, strong.

BAZIN, GUSTAVE, Mirecourt. A very capable workman, some of his 'cello bows are excellent.

BETTS. Born 1755, died 1823. Worked in London as a violin maker and dealer. The bows bearing his name were made by Edward Dodd and W. Tubbs.

BRAGLIA, ANTONIO, Modena. Beginning of this century. I have not seen any of this maker's work.

BROWN, JAMES (Junior), London. Born 1786, died 1860. A clever maker, worked much for the trade, but turned out some good sticks, stamped with his name.

CHANOT, ADOLPH, Paris. Brother of the late Georges Chanot of Wardour Street. Born about 1828. Worked with Henry of Paris and has turned out some magnificent sticks. His death, which took place suddenly, at the age of twenty-nine, was due to an aneurism. Had he lived he would undoubtedly have taken a high position in the esteem of bow wielders.

DARBHEY, GEORGE, Bristol. Died March, 1921.

DODD, EDWARD, London and Sheffield. Born 1705, died 1810. One seldom finds a bow bearing his name as he was mostly employed by others, such as Betts, Forster, Norris, etc.

DODD, JAMES. Worked in London in 1864; it is doubtful if any of his work can be identified as he almost invariably worked for others.

DODD, JOHN. Born in 1752, died in 1839. This was *the* English bow-maker *par excellence*. For fuller details of his life and work see [Chapter VI.](#)

DODD, THOMAS, London, 1786–1823. He differed from the others of this name inasmuch as he did not make for others but employed others to make for him.

EURY, Paris. Early part of the present century. His bows are universally esteemed, some of them being exceptionally fine. He did not always stamp his bows, but when he did it was generally under the "lapping" or, as some say, the "whipping."

FONCLAUSE, JOSEPH. Born in 1800, died in 1865. He was an excellent maker. He first learnt the art of bow-making from Pajeot at Mirecourt, and ultimately worked for J. B. Vuillaume at Paris. Later on he started on his own account. His bows from this period are usually marked with his own name.

FORSTER, WILLIAM. A noted English violin maker who was born near the middle of the last century. One now and then meets with a bow bearing his name. These are all the work of E. Dodd, W. Tubbs, or some other skilled workmen in his employ.

GAND AND BERNARDEL, Paris. A modern firm whose staff make some remarkably fine bows. They are mostly stamped with the name of the firm; but as they make bows to the order of various other firms there are many examples of their work either unstamped or bearing fictitious names.

HARMAND. Worked in Mirecourt about 1835. Made some fairly good bows.

HENRY. Born in 1812 at Mirecourt where he first learnt his craft. He worked there till his twenty-fifth year, when he went to Paris. Here he was employed by Chanot first, and later, by Peccatte. When Peccatte left Paris, Henry entered into partnership with Simon, another workman in

Peccatte's employ who had succeeded to the latter's Paris shop. This partnership lasted till 1851. He then worked alone. He was a magnificent workman and has produced some splendid bows. I have in mind a 'cello bow of his shown me by J. Chanot that is a marvel of strength and elasticity. He died in 1870. Sometimes his bows are stamped "Henry, Paris."

HILL, W. E., AND SONS, London. Contemporary. This firm issue some very fine bows which are made in their own workshops by expert workmen trained under the personal supervision of Mr. A. Hill.

JOSEPHS. American, contemporary. A very clever maker and repairer of violins and bows. I have seen some of his work that was excellent.

KITTEL, St. Petersburg. Modern. I have never come across a specimen of this maker's work. Fleming states that they "are about as nearly equal to Tourte's as those of any maker that has lived since his day." It is a pity they are not more plentiful if this is the case.

KNOPF, HEINRICH, and KNOPF, LUDWIG, Berlin, contemporary. Fairly good bows made chiefly to the order of other firms.

LAFLEUR, JACQUES. Born at Nancy in 1760, died in Paris 1832. One of the best of the old makers. Some continental authorities place him on a par with Tourte. Those of his make that I have handled are certainly very fine indeed.

LAFLEUR, JOSEPH RENÉ, Paris. Born in 1812, died in 1874. He was the son of Jacques Lafleur and inherited much of his father's skill.

LAMY, ALFRED JOSEPH. Born in 1850 at Mirecourt. He was an excellent maker. An interesting feature is that he learnt his craft at a remarkably early age. He worked first with Gautrot at Chateau-Fleury. He went, like the rest, to Paris in 1877, and worked for Voirin for some eight years. At Voirin's death he started in business for himself.

LUPOT, FRANÇOIS. Born at Orleans 1774, died at Paris in 1837. For fuller particulars of this maker see [Chapter 7](#).

MAIRE, NICOLAS, Mirecourt and Paris. Was a pupil of Jacques Lafleur but never did any work of great distinction.

MIQUEL, EMILE. A contemporary Mirecourt maker.

NÜRNBERGER, KARL ALBERT, Markneukirchen. Contemporary. A most finished workman and a clever imitator of the styles of various well-known makers. Has worked much for the trade. His best

examples are frequently stamped with his name, and amongst these will be found bows which are fit to rank with some of the finest productions of the French school. There are other makers of the same family engaged in bow making.

PAJEOT. Worked in Mirecourt in the early part of the present century. An excellent maker. He taught Joseph Fonclause who is known to have made some of the finest bows bearing Vuillaume's stamp.

PANORMO. The quaint faceted bows of which I have given an example in [Plate VIII.](#) were made, as far as I have been able to ascertain, by George Louis Panormo, in the early part of this century. Details concerning this family are neither plentiful nor clear, but it is fairly certain that this bow maker was a son of Vincent Panormo of Palermo, Paris, Ireland, etc., who first made the name famous in the fiddle world. A description of the characteristics of his work will be found in [Chapter VII.](#)

Fleming mentions a George Louis Panormo as a *modern* maker in London, but I do not know of such a maker. I am informed on excellent authority that all the Panormo bows were made in Paris.

PECCATTE, DOMINIQUE. Born in 1810 and died in 1874 at Mirecourt. Details of his life and work are given in [Chapter VII.](#)

PECCATTE, FRANÇOIS ("PECCATTE JEUNE"), Paris. Born Mirecourt, 1820, died Paris, 1855. A good workman, whose best bows, though not well known in this country, are of nearly equal merit with his brother Dominique's. He worked for ten years with Vuillaume. Some of his bows are stamped with his name, the lettering of the stamp differing slightly from that employed by his more famous brother.

PECCATTE, CHARLES, Paris. Son of François. Born Mirecourt, 1850. A good workman, but not equal to the other makers of the name.

PELLEGGRI, Italian, modern; neat workmanship.

PERSOIT. Worked in Paris about 1828 to 1841. He was employed largely by Vuillaume and most of his bows bear the latter's name, but he occasionally worked on his own account and then his work was stamped P.R.S.

PRICE, London. Contemporary, excellent maker. Pupil of Tubbs.

PFRETSCHNER, Markneukirchen. Contemporary makers, whose best work is of high merit and finish, though not quite equal to that of A. Nürnberger.

POISON, Paris. A really magnificent workman. He was employed largely by the firm of Gand and Bernardel, and the majority of his bows bear their stamp. One occasionally meets with a bow by this maker bearing his own name.

PUPINAT, Swiss. Middle of the present century.

RAKOWSCH, Paris. Modern.

RAU, AUGUST, Markneukirchen. Born 1866. A first-class workman. Worked much for Weichold of Dresden.

RONCHINI, Italian. Modern.

SCHWARTZ, GEORG FRIEDRICH, Strasburg. Born 1785, died 1849. Made some excellent bows marked "Swartz, Strasburg."

SIMON, P. Born at Mirecourt in 1808. Worked for D. Peccatte in Paris in 1838. After this he worked for Vuillaume for seven years. He then set up on his own account for some two years, and when D. Peccatte left Paris he took over the business in partnership with Henry. Three years later and he was again alone. His workmanship is always good and betrays Peccatte's influence.

SIRJEAN. French. Early part of the present century.

SÜSS, JOHANN CHRISTIAN, Markneukirchen. Born 1829. Died 1900. One of the best makers Germany has produced. Imitated the style of Tourte.

TADOLINI, IGNAZIO. Born at Bologna in 1791, died at Modena in 1873. Was established with his brother at the last-named town. Made some very fine bows but was not equal.

TOURNATORIS. French. Latter part of last century.

TOURTE. Eighteenth century, Paris. One of the best bow makers of the older type, chiefly known as the father of François Tourte.

TOURTE, SAVÉRE. Eldest son of the preceding and called "Tourte l'ainé," Paris.

TOURTE, FRANÇOIS, Paris. Brother of the above, the greatest of all bow makers. Born 1747, died 1838. For fuller particulars of his life and work see [Chapter 6](#) (Plates [V.](#) and [VI.](#)).

TUBBS, W., London. Early nineteenth century. Worked for Forster, Betts, Norris and Barnes. He was taught bow making by Edward Dodd.

TUBBS, JAMES. Son of the preceding. Born 1835. Died April, 1921. Many of his bows are graduated according to a system based on the calculations of W. S. B. Woolhouse, the mathematician (see [Chapter VII](#)). The Tubbs bows have qualities distinctly their own and when a player becomes thoroughly used to a "Tubbs" he rarely feels comfortable with even the finest bows of another make. Conversely, a player in the habit of using constantly any other bow experiences a slight feeling of strangeness on first trying a "Tubbs." The workmanship in a Tubbs bow is almost unique in its perfection. And there is a characteristic English solidity about the secure way in which all the fittings are adjusted. I have been an eye witness of the care and attention paid by his son, Mr. A. Tubbs to the work of repairing a bow that to the casual observer would seem past all treatment. His brother, C. E. Tubbs, was a good bow maker, but somewhat erratic.

VIGNERON, A. A modern French maker who turns out some extremely high class work.

VOIRIN, NICHOLAS FRANÇOIS. Another of the great Parisian bow makers. Learnt the craft in his native town, Mirecourt, where he was born in 1833. At the age of twenty-two he was employed by Vuillaume, with whom he worked for some fifteen years. It is believed that the finest bows bearing Vuillaume's name were made by Voirin. Some of his bows that were exhibited by Vuillaume in the Paris Exhibition in 1867 received honourable mention. I should say his work is more equal than that of any other maker. Of course, as with other popular makers, there are to be found plenty of worthless bows bearing the forged stamp, "N. F. Voirin, à Paris." His death, which took place in Paris in 1885, was very pathetic. He was walking along the Faubourg Montmartre on his way to the abode of a customer to whom he was taking a bow newly finished, when he suddenly fell down in an apoplectic fit. Fortunately his name and address, "Bouloi 3," was on the parcel containing the bow, and he was thus able to be taken home without delay. But how sad a home-coming! brought home in a dying condition to his wife whom he had left but a few minutes before in apparently good health. He died the same night.

VUILLAUME, J. B., Paris. This strange mixture of cunning and ability will be ever remembered as the craftiest of craftsmen. An undoubted genius as a violin maker, yet with all the tricks and subterfuges of the veriest charlatan. Concerning the real value of the historical details furnished to Fétis by Vuillaume I have spoken in [Chapter V](#). Though it is possible that he had considerable practical knowledge of bow making, I do not think he actually made any bows. He exercised great judgment, however, in the employment of skilled workmen, whom he kept as a rule for a number of years—a fact that is sufficient to stamp him as a good and considerate employer. The most noted makers who worked for him were Fonclause, Peccatte, Persoit, Simon and Voirin. It will thus be seen that the majority of the bows bearing Vuillaume's name are of the best possible workmanship and quality. Unfortunately there are in this case also a number of forgeries on the market. The most noteworthy features in connexion with Vuillaume, as regards bows, are his curious inventions—the steel bow, the fixed nut, the curved ferrule, and the self-hairing bow. Of the steel

bow, Mr. Heron–Allen says he has “never met with a specimen of so ponderous an eccentricity” except the one in South Kensington Museum. I have come across a number, and as they are tubular they are not at all as ponderous as the name of the material suggests. In fact I remember one that was very pleasant to play with. They are nearly always lacking in balance. The fixed nut was the result of an idea that the player should always have the same length of hair at his service. The curved ferrule was also a mistake, the idea being that it would be good to get a broad surface of hair on the string at the heel. The self–hairing bow was ingenious but of no practical value. These patents are detailed more fully in [Part II](#). Vuillaume was born at Mirecourt on October 7th, 1798, and was the son of the carrier between that town and Nancy. He died at Paris in 1875.

WEICHOLD, Dresden. An excellent firm, who put their name on a superior class of “trade bow.”

WILSON, JOHN JAMES THOMPSON, London. Born March, 1864, worked in his youth with James Tubbs, and later with C. E. Tubbs. Has worked much for the trade.

With this list of bow makers ends the historical section of these papers. As I have already explained, a perfect history of the bow is quite impossible to obtain, and all I have attempted has been to lay before my readers the facts I have accumulated. I have carefully abstained from promulgating any theories of my own with regard to the evolution of the bow (save in such cases where certain conclusions have been forced upon me by the evidence found) as from the conflicting nature of the records, I consider no one theory to be sufficient.